



只見短歌会 令和七年一月詠草

目黒 富子
忘れしは大事に至るも俟有りしなれど気付けるは倖として

関谷登美子
種々雑多あれもこれもと心しつ時の流れの早さと思ふ

立花 奏音
手に負へぬ息子のイヤイヤも人生の刹那と見れば愛しく思ふ

新国由紀子
子を持たぬ卒寿過ぎたる我が従姉私の彼よとみどり児あやす

渡部ヨリ子
朝陽浴び三日月残る雪景色今日は晴れかと窓より眺む

只見俳句会 一月定例会

都
去年今年エプロンのまま通しけり
子供等は中覗き見るお年玉

味代子
ウカウカと暦はどうに冬初め
空っ風すべる竿竹刻む音

一恵
書の話して時忘る大晦日
着膨れてカメラ構える只見線

礼
天よりも真白き大地年新た
静かさやブーツの沈む雪の道

一穂
病める目に朝の光や雪明かり
曾孫来て炬燵替りの寢床かな

修一
除雪者のエンジン音や雪の量
大寒や起きる起きるの繰り返し

信
豪雪のふるさと憂う朝かな
箱根路に母校の名なし新年会

睦子
みかん剥くふるさと遠くなりけり
寒卵孫が食べて笑顔かな